

有機農業の取組拡大に向けた関係者との意見交換会（第２回）
議事概要

日 時 令和７年８月２９日（金）１４：００～１６：００

場 所 農林水産省農産局第１会議室

Microsoft Teams（オンライン）

出席者 葛城山麓農園株式会社 西村 俊伸 氏

ひらばやし農園 平林 秀将 氏

有限会社山口農園 山口 貴義 氏

【先方コメント概要】

（有機農業の資材について）

- 紙の生分解性マルチを使いたいですが化学成分が土壌に残留するため有機 JAS 適合資材として認められておらず、使えない。マルチをはがす作業負担を考えると生分解性マルチを使いたい。
- ピーマンやズッキーニを誘引する際に使用するテープについて、畑に落ちたものを拾わないといけないので、土に還っても有機 JAS 認証上問題ないものを使いたい。光分解性のものがあるが、有機では使えない。
- 長ネギやブロッコリーを大規模に生産する際に必要なチェーンポットが、接着剤の成分を理由として有機 JAS 認証では使用できないなど、作物によってはそもそも有機 JAS 認証に準拠した資材開発・調達が間に合っていないという問題がある。
- 資材高騰により有機 JAS 適合の種まき培土や肥料が手に入りにくくなっている。
- 慣行のものと比較すると資材価格が倍以上になる。また、資材の購入先も限られているため、調達に苦労している。
- 物流コストやハウス・出荷資材等が非常に高騰している。野菜は販売単価が高くないので、利益を出しにくくコスト削減にも限界がある。

（有機 JAS 認証について）

- 最初の審査時には記録を全てプリントアウトして提出する必要があるなど審査の準備が大変。普段の記録はデジタル化しているので、それを認証取得時にも活用できるようにすれば審査の効率化になるのではないかと思う。また、デジタル化できれば、提出時だけでなく修正作業等の負担軽減にもなる。

- 有機ＪＡＳに対応した営農支援ツールなど、農作業記録を一元的に管理し、有機ＪＡＳの記録としても適用できるようなシステムがでてくることを期待している。
- 有機ＪＡＳ認証について、現状では認証の取得・更新にかかる工数や費用を補うほどのリターンがない。
- 近隣地域では、１～２割高い価格の有機ＪＡＳ認証野菜と慣行の地場産野菜が並んでいる場合、慣行の地場産野菜を選択する人が多い傾向にある。有機ＪＡＳ認証を取得して高く販売しても逆に売れ残る可能性もあるので、現在の販売先に関しては認証取得するメリットを感じない。
- 今の出荷先からは有機ＪＡＳ認証取得しなくてもいいと言われる。認証取得したら高く買い取ってくれる出荷先があればいいが、期待はできない。
- 有機ＪＡＳの強みであるトレーサビリティを担保するために審査で必要な書類が多岐に渡り量も多くなることは理解するが、だからこそ、有機ＪＡＳ取得に対して他のメリットを付与してはどうか（環境負荷低減に関する補助金の申請手続き簡素化など）。
- 有機種子は入手できる作物に限られるため消毒済みの種子の使用が許容されている点や、ナス科やウリ科は育苗のハードルが高いため種苗会社から農薬を使用した苗を購入することが可能である点など、有機ＪＡＳの認証基準に腑に落ちない点がある。

（新規就農者が学ぶべきことについて）

- 民間運営の有機農業の学校では、集客の必要性から栽培技術等の内容に偏りがちで、有機志向の新規就農者が有機農業のハードルの高さを理解していない場合がある。
- 有機農業は除草など負担の大きい作業があるということを最初に理解してもらわないと、挫折する要因になると思う。
- 栽培技術を学ぶことも重要だが、有機農業においては、草の管理がどれだけ大変かを就農前に実体験として学んでおかないと、農作業や出荷調整の時間を確保できなくなる。
- インターンや研修で就農前に現実を知る必要があると思うが、有機農業自体様々なスタイルがあり、地域によっては研修先となる認定農業者がいない場合もある。研修先をカテゴライズする、認定農業者以外の有機農業者のもとでも研修を受けられるようにするなどの工夫により研修受け入れのハードルを下げてはどうか。
- 地元の農泊推進協議会では、移住者向けの農業学校を開設して移住者が地元になじんでいけるようにサポートしている。本来なら行政がすべきことだと思い相談したが、対応する気はないとのことだった。

- 有機農業の中には、雑草や害虫をしっかりと管理する慣行農業に近い農法もあるが、慣行農家の間ではよくないイメージが先行しており、受け入れてもらうことが難しい場合もある。
- 新規就農はいかに地域に溶け込むかが大事。例えば、隣の農地の人が自分より草刈りが早く終わってしまうと自分になまけていると言われる。有機農業で地域との信頼関係を築いていくためにはそういうことも教える必要がある。
- 出荷調整で見た目をきれいにするなど、農家として当たり前の技術を身に着けるための実地訓練の場が必要と思う。
- 除草に時間がかかるため、ハウスで灌水している間に草刈りをするなど、時間を有効に使うことを特に有機農業の場合は教えた方がよい。
- 原価コストを知らず、どんぶり勘定になっている人も多いので、希望年収から逆算してどれくらい生産・販売して利益を上げる必要があるのか等、経営計画の立て方を教える必要がある。

（支援の在り方について）

- 集落営農等の組織向けの草刈機の導入を支援する補助金はあるが、個人農家への補助金も拡充してほしい。慣行農家と共用する場合、毎回使用前に洗浄する必要があるため、手間を考えると共用は現実的ではなく、個人でこれらの機械を所有することが望ましい。
- 有機農業に限らず、後継者不足で高齢者が草刈りを行い、熱中症になったり、ケガをしたりするケースが散見される。機械の導入支援だけでなく、景観維持の観点からの補助金や、草刈りを外部委託する際の補助金などもあるとよい。
- 有機農業は殺虫剤や化学肥料を使用できず、非常にリスクが高いため生計を立てるのが難しい。そのため有機農業の生産者の所得補填のような形の支援があるといい。
- 水田活用の取組について、本来の目的は農地が荒れないようにすることであり、水稻に限らず野菜等を作る取組も農地活用だと思うので、「水田活用」ではなく「農地活用」として支援をするべき。
- 70～80枚あった水田を3枚ぐらいに集約した。貸し借りだけでなく、こういった土地の集約も中間管理機構でしていただけると参入しやすくなるのではないかな。
- 農地の貸し借りについて、中間管理機構から貸し手側にも草刈りの手伝いをするよう啓発して、地域全体で農地を守るということをしないといけない。

（農業支援サービス事業者の活用可能性等について）

- 慣行農家も含めた形であれば、多くの地域で農業支援サービス事業者を活用できる可能性もあると思う。
- 米の価格が上がっていく中で、有機米の価格が、採算が合うようになれば有機に目が向く可能性もあるが、高齢の兼業農家がほとんどなので、新しく有機農業に取り組もうと考える人は少ないのではないかな。
- 有機農業の場合、除草剤が使えないという事情があるので、地域だけで取り組むというのは難しいのではないかな。
- 基本的に中山間で法面ばかりなので、除草の委託費用の負担が大きくなるのではないかな。
- スマート農業について、リモコン除草機が法面の傾斜に対応できないなど、中山間地域での活用はまだ難しいと感じている。
- 農薬の費用や作業負担の軽減になることがわかっていけば、ＪＡ主導であれば作業委託がすすんでいくのではないかなと思う。

（その他、販売戦略、理解醸成などについて）

- 品目を絞って効率化したいが、同じものを大量に栽培しても販売先を見つけることができない。
- 有機農産物として共通した商品価値を訴求していくことが必要だと思うが、慣行農家との対立が生じる可能性もあるため、美味しさや安全性で商品価値の訴求を行うことは難しい。
- 消費者意識について、見た目重視の傾向が強すぎるため、有機農産物であろうと一定水準以上の見方でないと店頭では売れない。消費者向けに中身を重視するような啓発を行う機会を増やしてもよいのではないかなと思う。
- 学校給食や地産地消も大事だが、収入を増やし、安定的な農業をしていくためには首都圏や都市部の需要があるところに出していけないといけな。例えば、県内市場の中に有機ＪＡＳの小分け認証を取得した加工場を作れば物流コストが削減できるほか、生産者は作った野菜をそこにもっていきだけでよく、栽培と収穫に専念できるので有機農業に取り組みやすくなる。

—以上—